

衣類の防虫剤として使われるナフタリンは、常温で昇華する。つまり、固体から液体の状態を経ずに、直接、気体へと変化する。この現象に興味を抱き、ナフタリンを作品の素材として取り入れた現代美術家の宮永愛子さん。常に変化をし続ける作品として注目され、独自の世界観を表現している。

すべてのものは変化しながら存在し続ける 時間の痕跡をシリコンで型取りし ナフタリンという繊細な素材で独自の世界観を表現



現代美術家 宮永 愛子さん

ナフタリンと聞いて思い浮かぶのは、衣替えで衣類をしまう時にタンスや衣装ケースに入れる防虫剤。袋に入った防虫剤は、半年後には跡形もなく消えている。昇華するナフタリンを、自ら編み出した手法で、アート作品へと昇華させた現代美術家の宮永愛子さん。ライトに照らされ、ほの白くたたくむ作品は、儂げでありながら、確かな存在として息づき、時間の積層や変化する世界とのつながりに私たちの意識を向かわせる。“すべてのものは、消えることなく変化しながら存在し続けている”という世界観を表現するのに、ナフタリンはぴったりの素材だったのだろう。ナフタリンを使った独特の作品で注目される宮永さんに、ナフタリンとの出会いや作品づくりに込める思いなどを伺った。

●宮永 愛子 (みやなが あいこ)
1974年 京都市生まれ。京都造形芸術大学美術学部彫刻コース卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。国内外で個展、グループ展を数多く開催。2012年には国立国際美術館で個展「宮永愛子:なかそら—空中空—」を開催。
受賞歴:第3回shiseido art egg賞(2009年)、五島記念文化賞 美術部門新人賞(2011年)、日産アートアワード2013 グランプリ(2013年)ほか。
宮永 愛子ホームページアドレス: <http://www.aiko-m.com/>

シリコン ここがポイント!

- Point 1 耐熱性がある
- Point 2 複雑な形状も忠実に再現できる
- Point 3 柔らかく、伸びがよい

宮永ワールドを引き出し、進化させる ナフタリンとの出会い

宮永さんの作品を語るときに、ナフタリンという素材は外せませんが、ナフタリンに着目したきっかけは何だったのですか。

宮永 小さな頃からモノづくりには興味があって、誰もやったことのないことをやってみたくて思っていました。大学では彫刻を専攻したのですが、木や石、金属、樹脂など、彫刻で一般的に使われる素材ではない“他素材”を扱うゼミに所属し、普段から何か新しい素材はないかと探していました。そんなある日、実家の衣替えを手伝っていた時、中身はなくなっているのに、ぺちゃんこにならず、何かがあるという痕跡をどめている防虫剤の袋を見つけて、興味を持ったことがナフタリンとの出会いでした。ナフタリンで作品を作れたら、今までの彫刻の分野にはなかったものが作れるんじゃないかと思い、化学辞典をいろいろと調べたり、実験をしたりし

て、その方法を考え出しました。

ナフタリンは、昇華、つまり固体から液体にならずに、直接、気体になるんですね。

宮永 はい。最初は私も、ナフタリンが常温で気体になるところに興味を持ち、消えてなくなる作品が作れると思っていたのです。ところが、ある時、透光性のあるナフタリンを光を通しながら存在するように展示するために、作品をケースに入れて下にライトボックスを仕込みました。しばらくすると、ナフタリンがただ昇華しているのではなく、再び結晶化していることに気がきました。ナフタリンの作品は、空気に触れないように密閉されていて、まさにタンスの中と同じことが起こりますが、閉じられた空間では、ライトで温められたことによって、昇華したナフタリンが再び結晶として現れてきたのです。その時に、消えているのではなく、形が失われると同時に新しい結晶として生まれているんだと気がきました。すべてのもの

は変わり続けながら存在している、と。同時に、作品に取り組む自分を少し離れて客観的に見ることができました。ケースの中で起こっていることは、世界で起こっていることと同じじゃないかと思えて、普段から興味のある時間のこと、自分が観察してきた世界のあり方や変化、作品に取り組む自分、そして世界と自分の作品とのかかわりなどが一つにつながり、とても自然なこととして自分の中で“すとん”と納得できたのです。

身近なものに刻まれた時間の痕跡 その再現に欠かせないシリコン

そのナフタリンの作品の型取りにシリコンが使われているわけですね。

宮永 最初は、紙で型を取ったり、アルミ箔に流し込んで形を作っていたのですが、もっと複雑な形を作りたいと思い、シリコンを使うようになりました。ナフタリンは、固まる時に熱がかかるのですが、シリコンは熱に強く、非常に細かい

ディテールをそのまま再現できます。例えば誰かが履いていた靴。かかとがすり減って、しわが入っている靴には、その人だけの時間が刻まれています。それを、シリコンで型取りして、かかとの減り具合やしわなど、細かいところまでを再現する。これは、言ってみれば、その人の、その時までの時間がある一瞬、とどめるような仕事だと思えます。そのとどめた時間をナフタリンに置き換えるわけです。私は、靴やかばんなど身近なものをモチーフとしていますが、それは、見る人が時間の痕跡や、これから起こるであろう変化などをリアルなものとして感じ、体験できると言うからです。

宮永さんの作品の根底には、時間というものへの特別な思いがあるようですね。

宮永 いわゆる時間というと、一つの方向に同じように刻まれていくものとされていますが、人間は一瞬のうちに過去に帰ることもできるし、未来を想像することもできる。社会的な時間であれば、極めて個人的な時間もあるし、精神的な時間もあるじゃないですか。そう考えると、時計が刻むような、たった一つの方向に一定の速さで進む時間だけではなく、時の層は何層もあって、その進み方もさまざまな気がしてきて、そういうことを考え出すと気持ちがざわざわします。平成23年度の五島記念文化賞美術新人賞を頂いた五島記念文化財団の助成で、アメリカと中南米に行ったのですが、そこで見た景色、例えばアンデス山脈が隆起した時に海の水がそのまま山の上に残ってきたウユニ塩湖や何億年という時間の中で堆積してきたアメリカの大地を目のあたりにすると、日本にいるときには想像もできなかったようなスケールの時間があった、自分の時間の感覚もぐらつきました。でも、それでハッとさせられて、新しい気付きになりました。

た。そういう場所がかつて日本と陸続きにあって、海の底も山の頂上も全部つながっていると思うと、とても不思議な気持ちになり、それは世界が広がる瞬間でした。自分が考えていることと同じようなことが起きている世界をこの目で見て、その空気に触れて、体験することは、作品を生み出す力になりますね。

透明樹脂に封入され、目覚めを待つオブジェ 目覚めた瞬間から新たな時間の層が積もる

今回見せていただいたのは、ナフタリンのオブジェを樹脂に封入した作品ですね。

宮永 シリコンで型取りして、ナフタリンに置き換えられた椅子や靴を透明樹脂で封入しているのですが、ナフタリンはとても熱に弱く、一方で樹脂は固まる時に熱を出すので、本来は相いれないものなのです。ですから、時間をかけて少しずつ樹脂を重ねていきます。横から見ると透明な樹脂が層になっていることがわかりますが、それは、毎日少しずつ樹脂を重ねていった時間の層です。この封入の作品には、空気に触れる面を1カ所だけ残してありますが、そこは封印されています。ナフタリンに置き換えられた時間の痕跡が樹脂に封入されると、そのまま眠っている状態が始まります。眠っている間は、ナフタリンの白い存在の形になっていますが、封を開けて空気の通り道をつけた瞬間から、また時間が動き出し、不在の痕跡である半透明の形が現れる。それまでの時間とはまた違った、見る人との関係を持つ新たな時間の層が積もっていく。よく、作品をご覧になった方からどのくらいで変化するのかと聞かれますが、実際にその変化を見ることが大切なのではなく、今、こういう現象が起きていると認識したうえで、作品に込められた時間の痕跡や、その作品に向かう自分、世界と自分のつながりなどを想像することが大切で、それが人間の豊かさだと思っています。

世界で起きている現象や時間の積層などを作品を通して体験するというのでしょうか。次はどんな作品が生まれるか楽しみです。

宮永 封入の作品をさらに進化させたいと思っています。今は、キューブの形の中にナフタリンのオブジェを封入していますが、これを単なるキューブではなく自分の好きな形、例えばトランクなどをシリコンで型取りして、さらにその中にシリコンで型取りしてナフタリンに置き換えたものを封入する作品を作っていきたいです。今回、その第一段階として、シリコンで型取りした本の中にナフタリンに置き換えたパズルのピースを封入した作品を作りました。これは、新しい1ページの始まりです。これまで、シリコンでの型取りにしても、ナフタリンの化学的な特徴にしても手探りでやってきて、自分の知識や情報だけではわからないことがまだまだたくさんあります。違う分野の人と交流ができれば、お互いに自分とは全く違う世界での発想を知ることができ、今までとは違うものを生み出せる可能性があるのではないかと思ったりします。私の作品の世界を好きだと思える人と一緒に仕事ができたら、もっともっと世界を膨らませることができるはずですよ。

新たな宮永ワールドを創造し、広げていかれることを楽しみにしています。今日は、お忙しい中、お時間をいただき、ありがとうございました。

取材協力: ミヅマアートギャラリー



「まどろみははじまるとき」
2003/ナフタリン、ミクストメディア
写真: 島山崇
©MIYANAGA Aiko
Courtesy Mizuma Art Gallery



「house -waiting for awakening-」
2012/ナフタリン、樹脂、ミクストメディア
写真: 木村和穂
©MIYANAGA Aiko
Courtesy Mizuma Art Gallery



初の作品集
「宮永愛子作品集
空中空(なかそら)」
(青幻舎)